

注目高まる訪問リハビリ

製鉄記念室蘭病院・村岡さんに同行

介護保険や医療保険で受けられる在宅サービスのひとつ、訪問リハビリ。理学療法士や作業療法士らが利用者の自宅を訪れ、体の機能回復に向けた指導などを行う取り組みだ。高齢化を背景にニーズは高まりつつあり、西胆振では待機者もいる。製鉄記念室蘭病院訪問リハビリテーションセンターの村岡洋平さんの仕事に同行し、訪問リハビリならではの効果や、現場で働く専門家の思いを探った。（権藤泉）

高齢者の生活向上ケア

外出支援や 摂食・排泄： 要介護度改善も

村岡さんの訪問リハビリは、薬に頼らないが意思疎通がで同行したのは11日。朝、4カ所を巡る日程だ。この日は、3人目は八丁平の沼尾さん(79)。村岡さんは病院から10分ほどの沼尾さん宅へ車で向かった。

沼尾さんは3年前に脳梗塞で倒れ、右半身にまひがある。村岡さんは、まず家の中で足の上げ下ろしや体さ(こ)という。例えば入浴の重のかけ方などを練習。10分ほどの訓練を終え、近所の散歩に出かけた。

「花が咲きましたね」。村岡さんの言葉に沼尾さんが顔をほころばせる。舗装された道路だけでなく、公園の土や砂利の上も歩くことで、足腰の機能回復の効果が高まるという。季節を感ずることは、前向きな気持ちにもつながる。

当初は要介護度5だった沼尾さん。現在は3だ。話すというより普段の生活を

葉は出ないが意思疎通がでただけでなく、日常生活で困っているこの解決を手伝えるのが訪問リハビリの良きところ。例えば入浴の風呂を使う、実際に家動きを一緒に練習する。家族にも介助方法をアドバイスしている。

続けて訪問したのは東町の林隆子さん(83)。5年前に骨折し、現在は筋肉の萎縮などが進む廃用症候群。背中や肩をほぐす体操や歩行訓練を指導した後、ベッド上で筋肉を伸ばすリハビリをした。村岡さんは「治すというより普段の生活を

村岡さんと散歩する沼尾さん(右)。リハビリの日は楽しみですかと尋ねると「こころうなすいた」



林さんの体操をエックしながら身体をほぐす村岡さん



村岡さんの指導で体操する林さん



中で気になる点があれば、担当のケアマネジャーに連絡することもある。「村岡訪問リハビリは週に1、20分まで、2人は40分ずつ週3回利用している。製鉄記念室蘭病院の訪問リハビリセンターでは、村岡さんを含め職員4人で約90人を担当。情報を共有し、外出支援、めまい対策、摂食・排泄改善、緩和ケアなど、幅広い取り組みを続けている。利用待機者も10人ほどいるという。」

2年前には、室蘭、登別両市内で訪問リハビリに携わる10施設の職員が「連絡会」を立ち上げた。現在は理学療法士、作業療法士、言語聴覚士ら26人が所属。知識や技術向上のための研修会などを行っている。両市内の利用者は現在、数百人。要介護認定を受けたい人全体から見ると、利用率は道内と同程度の2割程度だ。全国平均の約30%を下回っている。連絡会委員の成田元氣さん(登別厚生年金病院)は「利用者一人一人の生活に合わせたリハビリができる良さを地域の人にもっと知ってもらいたい」と話している。

をしたり、村岡さんが自分の出張の土産話で笑わせた。40分間のリハビリは終始和やか。体調や会話の

を終業後に集まり、研修会などの計画を話し合う室蘭・登別訪問リハビリテーション連絡会の役員ら